

〔續古事談王道后宮〕後三條院ハ、春宮ニテ、廿五年マデオハシマシテ、心シヅカニ御學問アリテ、和漢ノ才智ヲキハメサセ給フノミニアラズ、天下ノ政ヲヨク／＼キ、オカセ給テ、御即位ノ後、サマザマノ善政ヲオコナハレケルナカニ、諸國ノ重任ノ功ト云事、長ク停止セラレケル時、興福寺ノ南圓堂ヲツクレリケルニ、國ノ重任ヲ關白大二條殿藤原教通マゲテ申サセ給ケルニ、事カタクシテ、タビ／＼ニナリケレバ、主上逆鱗ニオヨビテ仰ラレテ云ク、關白攝政ノオモクオゾロシキ事ハ、帝ノ外祖ナドナルコソアレ、我ハナニトオモハンゾトテ、御ヒゲヲイカラカシテ、事ノ外ニ御ムヅカリアリケレバ、殿座ヲタチテイデサセ給フトテ、大聲ヲバナチテノタマハク、藤氏ノ上達部、ミナマカリタテ、春日大明神ノ御威ハ、ケフウセハテヌルゾトイヒカケテ、イデ給ケレバ、氏ノ公卿、マコトニモ一人モノコラズ、ミナ座ヲタチテ、殿ノ御トモニイデケレバ、事ガラオビタシクゾアリケル、主上コレヲキコシメシテ、關白殿并ニ藤氏ノ諸卿ヲメシカヘシテ、南圓堂ノ成功ヲユルサレニケリ、殿ノ御威モ君ノ御心バヘモアラハレテ、時ニトリテ、イミジキ事ニテナムアリケル、

〔春日權現驗記四〕知足院殿藤原忠實天下の執柄として、生前の榮花をきはめ給しかば、すでに四旬の齡をすぐして、いたづらに九夜のやみをまつことを恐れて、功成ぬれば身乏りぞかんとおぼしたりければ、出家のいごまを申さむとて、春日の社にまゐらせ給たりけるに、十一二ばかりなる兒童、俄に氣だかき姿になりて、略この童の申様我は是春日第三神也、此度見參は、殊に嬉く侍り、略中さても二人の男子をもち給へば、二人ながら氏長者につらなり給べし、忠通公、世の政すなほにて、手跡うつくしく、詩歌管絃巧みにおはしませば、世によき人と申べし、然れど道心のおはせねば、我心にはいたくもかなはず、おと、頼長は、全經を業として、政務きりとほしにして、人の善惡をはかり知こと、掌を指すがごとし、されば末代にはあり難き人にてあるべけれど、